



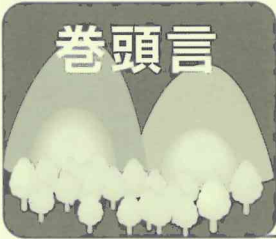
子ども樹木博士 ニュース

2014 - 6

No. 55

子ども樹木博士認定活動推進協議会

巻頭言



「みどりの日」に思うこと、 そして「山の日」制定へ

林野庁森林整備部森林利用課 山村振興・緑化推進室長 今泉 裕治

皆さんは、数ある祝日の中で、どの日が一番身近で親しみを感じるでしょうか。林野庁で緑化推進に関わる仕事をしていると、一国民として祝うという観点からは離れるかも知れませんが、やはり「みどりの日」が最も身近なものに感じられます。

「みどりの日」は、昭和天皇の御崩御に伴い、それまでの天皇誕生日であった4月29日と定められ、その後、平成17年の「国民の祝日に関する法律」（以下「祝日法」といいます。）の改正により5月4日に改められました（施行は平成19年から）。

平成18年には、「みどりの日」についての国民の関心と理解を一層促進し、「みどり」についての国民の造詣を深めるため、4月15日から5月14日までの期間を「みどりの月間」と位置づける閣議決定が行われ、この期間中、全国で各種の緑化行事や自然観察会などが集中的に行われています。

さて、そもそも祝日とは何なのでしょう。祝日法の第1条には、「美しい風習を育てつつ、よりよき社会、より豊かな生活を築きあげるために、ここに国民こぞって祝い、感謝し、又は記念する日を定め、これを『国民の祝日』と名づける。」と謳われています。

同法第2条には、「みどりの日」について「自然に親しむとともにその恩恵に感謝し、豊かな心をはぐくむ。」と定められていますが、あらためてこの法律を読むと、「みどりの日」以外にも、「春分の日」について「自然をたたえ、生物をいつくしむ。」とされ、また、「海の日」について「海の恩恵に感謝するとともに、海洋国日本の繁栄を願う。」と定められており、自然をたたえ、あるいはその恩恵に感謝する趣旨の祝日が複数存在することに気が付きます。

そして、今般の通常国会において、新たに「山の日」を国民の祝日に加えるための祝日法改正法案が可決成立しました（5月23日）。同改正法では、「山の日」を8月11日とし、その意義を「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する。」としています。「山の日」は平成28年から、16番目の祝日として施行されることになります。

これで、わが国の16の祝日のうち4つが自然の恩恵に関わる祝日となる訳です。日々忙しく時間に追われて毎日を過ごす私たち現代人にとって、祝日は単なる骨休めやレジャー等の機会となりがちですが、せめてこれらの祝日くらいは、あらためて森林や樹木、自然環境などに思いをめぐらせ、その恩恵に感謝しながら1日を過ごしてみるのも良いのではないのでしょうか。

【目次】

巻頭言 「みどりの日」に思うこと、そして「山の日」制定へ	林野庁森林整備部森林利用課 山村振興・緑化推進室長 今泉 裕治 … 1
特集 I 地域の樹木に親しみ、大事にしていこう	一般財団法人自然環境研究センター 研究員 吉村 妙子 … 2
特集 II 森を楽しく 一名誉森林インストラクター 故山中寅文先生の思い出（連載1）	一般社団法人日本森林インストラクター協会 常務理事・事務局長 寺嶋 嘉春 … 3
事例報告 I 緑の教室 ー子ども樹木博士に挑戦ー	オホーツク森の案内友の会 副会長 樋口 政弘 … 4
事例報告 II 高槻市里山グループにおける子ども樹木博士の取組	たかつき環境市民会議 里山グループ 杉山 正寿 … 5
シリーズ 東南アジアの木々たち（24）ーマストの様な不思議な樹形ー	自然と植物の観察会 TREECIRCLE 梅本 浩史 … 6
子ども樹木博士質問コーナー	茨城県植物園緑のインタープリター・森林インストラクター 堀内 孝雄 … 7
ア・ラ・カルト：草木の名前を覚えようー樹木のメバエ、事務局だより	…………… 8

特集Ⅰ



地域の樹木に親しみ、 大事にしていこう



一般財団法人自然環境研究センター研究員(森林インストラクター) 吉村 妙子

木々の緑が濃くまぶしい季節になりました。私が通っている裏高尾の森も、スギ林、ヒノキ林、コナラやクヌギ、そして多種のカエデ類などからなる広葉樹林が緑色のパッチワークをなしています。

各地の森にも、「顔」となるいくつかの樹木があることと思います。植物の種類構成は気候や地質、長い年月で築かれてきた生き物同士の関係、人間の関わりなど様々な要素の現れです。その地域らしい森を守っていくには、動植物のつながりも含めてまるごと守ることが重要だと思えます。

ところで、森を守っていく方法はその森の特徴によって異なります。知床や屋久島のような原生的な森林は出来るだけ自然な状態を保つ必要がありますが、身近な里山林は定期的に入る人手が欠かせません。里山林を住処とする動植物は、人間活動のサイクルに適応して生きてきた生き物です。人々は工夫しながらそれぞれの場所に応じて森や小川や草原などを利用し、生き物たちはそこに適応して暮らしてきました。

また、日本は南北に長く標高差も大きいので、地域によって様々な森林が見られます。更に、日本は島国ということもあって独特の進化をした固有の動植物も多く、日本列島自体が世界の中でも生物多様性が高い地域です。裏高尾の活動地に多いカエデ類にはたくさんの日本固有種があり、スギとヒノキも日本固有種だそうです。



森の中には多様な種、世代が生きています。

校庭や公園などを舞台に子ども樹木博士で樹木観察のポイントをつかんだら、図鑑を手に、身近な里山や地域のシンボリックな山などを歩くと、楽しみが広がることと思います。公園などに比べて樹木の種類が多く、見やすい場所に枝や葉が無くて、なかなか名前が分からないかもしれません。でもそこは気にせず、森の空気を思い切り吸って、森を五感で味わえば十分です。私も、図鑑をしまって木陰に座り、ただのんびりと過ごすことがあります。五感で楽しめば樹木を観る眼が養われていき、その森の「顔」といえる木が見えてくるのではないのでしょうか。

ところで近年、地域の生き物を脅かす侵略的な外来種が問題化しています。捨てられたペットやきれいだからと自然環境に植えられた外国産植物、管理が行き届かず飼育場や庭などから逃げ出した動植物、荷物に紛れ込んで拡がった生き物などが、在来種を捕食したり、ねぐらや餌を奪ったり、在来種と交雑して遺伝的に脅かしたりしています。また国内在来のものであっても別な地域に持ち込むのは問題であることが分かってきました。その個体自体に罪は無いのですが、地域の生態系への影響を考えると駆除せざるを得ないという、心の痛む問題です。

裏高尾の森でも自動撮影調査でアライグマの生息が確認され、園芸品種のスミレが見つかります。ある時はヒマワリが林道沿いにずらりと生えてきました。誰かが良かれと思って種を蒔いたのでしょうか。樹木に親しむ市民のマナーとして、外国産の植物や園芸植物などを自然環境に持ち込まないことや、ペットは絶対に野山に放さず責任を持って飼うことなど、心がけたいものです。

地域の動植物を身近に感じ、地域それぞれの「森と人のつながり」を守っていくことが、ますます大事になってきています。子ども樹木博士活動は、その入り口の一つではないのでしょうか。

今回で私の連載は終了させていただきます。長い間、拙文にお付き合いいただき、本当にありがとうございました。

特集Ⅱ

森を楽しく

— 名誉森林インストラクター 故山中寅文先生の思い出—
(連載 1)

一般社団法人日本森林インストラクター協会 常務理事・事務局長 寺嶋 嘉春

山中寅文氏の経歴

山中寅文氏は、昭和元年鹿児島生まれ。昭和 19 年に鹿児島県立伊佐農林学校林学科を卒業し、東京大学千葉演習林で 1 年間の研修を経て、東京大学農学部林学科森林植物学教室文部技官として奉職されました。昭和 62 年に定年退職されるまで、小石川植物園の一角にある農学部施設を拠点として、40 年間にわたり、樹木の実生の育て方の研究や大学での研究教育に携わられました。そして、退官後は精力的に森林文化協会のグリーンセミナーや森林浴などで、楽しいインストラクションをされて人気を博しました。

自然に接することの大切さを伝える

特に、子供たちに自然への関心を呼び起こし、自然の中の生活には人間にとって大切なもの、そしてたとえようのない楽しみがあることを教え伝えるため、子供たちのみならず、若い親たちや小学校の教員たちとともに野山に出かけ、どのように自然へ接すればよいかを教えました。

平成 3 年に森林インストラクターの資格制度が創設され、多くの実績のある山中寅文氏は、名誉森林インストラクターの称号を付与されました。

そして、平成 15 年 1 月に多くの関係者に惜しまれつつ故人とられました。

山中先生の思い出

筆者は、山中先生が大学に在職されていた昭和 60 年に、グリーンセミナーでお会いして以来、山中先生にお声をかけていただき、約 20 年間にわたり、月に 1、2 回ぐらい、関東近辺の山野での観察会や小石川での夜の研究会に参加し、間近に先生の樹木や森林のお話を伺う機会を持ちました。山中先生のお話は、今日においても大変貴重であると考え、連載させていただきます。今回は、その第 1 回です。

早春のある日

「ニワトコは早春の一番早い時期に葉が出てくるのですが、今は、もう 3 センチぐらい出ています。ニワトコというのは昔からよく使われたものです。私も、子供の頃は、メジロやウグイスを捕ったものですが、籠を作って中に止まり木をつくります。この止まり木

にはニワトコの枝が一番よるしい。なぜかという、鳥がケガをしません。昔はニワトコを黒焼きにしてメリケン粉と酢をあわせて、骨折した箇所にあてて骨をつなぎました。だから骨を接ぐ木、接骨木と言っています。」こんな調子で、周囲を話しに引き込みます。

葉っぱあそび

山中先生は、いつも腰に剪定バサミを携行し、公園や森を歩きながら、よく葉っぱ遊びをして見せました。

ヤマボウシやハナミズキなどの葉を見つけると、写真 1 のようにちぎって楽しそうに葉を風になびかせます。糸でつながったようになる葉の植物は、ミズキ、サンゴジュ、サンシュユなどもあり、植物を身近に感じることができます。

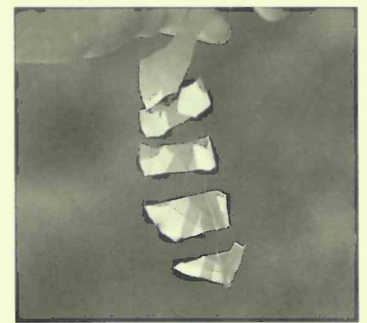


写真 1

スギ葉の話

「杉」という漢字は、なぜ、木偏に「三」と書くのか分かりますか。と言いながら、スギの葉を手にとって、両端をつまみちょっと振ります。すると写真 2 のように、スギの葉

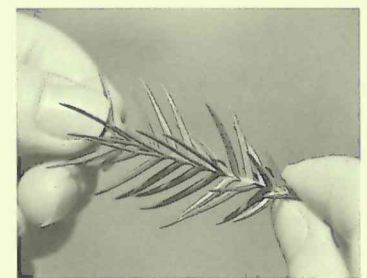


写真 2

の小葉が、3 本ずつ一組に並び、あたかも、「杉」の漢字の右側の「つくり」のようになります。

ツバキの葉のゾウリ

簡単にできる葉っぱ遊びでは、写真 3 のツバキのゾウリもあります。これを見せてから、ツバキについての解説をはじめます。

(次回に続く)

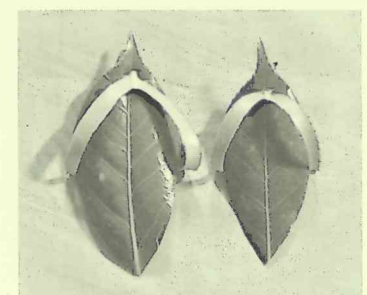


写真 3

事例 報告 I

緑の教室
—子ども樹木博士に挑戦—



オホーツク森の案内友の会 副会長 樋口 政弘

北海道のオホーツク管内の住民で組織する「オホーツク森の案内友の会」の活動を紹介します。友の会は、「森林・林業・自然等の普及啓発、青少年育成等を行い、森の案内人としての資質向上を図る」ことを目的としています。

平成 25 年度は訓子府町立訓子府小学校、斜里町立朱円小学校（峰浜・以久科小学校合同）、北見市立相内小学校の三校で開催されましたが、このうち斜里町立朱円小学校での活動を紹介します。

小学校は、斜里町からウトロ方面へ 7 km 程行った畑作中心の農村地帯で、世界自然遺産に登録されている知床の山々が見える場所にあります。学校は明治 33 年に創立され、周囲には沢山の樹木と強風から学校を守ろうと地域の人たちにより植えられた約 7 千 m² の桜園があり、学校のシンボルであるとともに地域住民の憩いの場となっています。

子ども樹木博士に挑戦したのは、斜里町立朱円小学校、峰浜小学校、以久科小学校による合同開催で、1 年生から 6 年生の児童 51 名です。（写真 1）

まずはじめに朱円小学校の敷地内にある樹木 30 種を観察した後、校舎内に移動して室内実習と認定試験を行いました。樹種は、カラマツ、トドマツなどの針葉樹やミズナラ、カツラ、ヤチダモなどの広葉樹です。（写真 2、写真 3）

朱円小学校と峰浜小学校は毎年「子ども樹木博士」にチャレンジしていますが、以久科小学校は今回が初参加です。普段見慣れている樹木ですが、各校の低学



写真 2 樹木観察



写真 3 認定試験

年は正しい樹種名ではなく「針葉樹はマツの木」、「ミズナラはドングリの木」と覚えている児童が多くいました。初めて聞く名前や葉の特徴に戸惑いながらも熱心に講師の説明に耳を傾けていました。

認定試験では、屋外で観察した樹木を思い出しながら、葉の標本と樹木の特徴を書いたカードを見て樹種名を回答します。残念ながら全問正解者はいませんが、30 問中 20 問以上正解（2 段認定）が 7 名、11 問以上正解（初段認定）が 20 名と、短時間での観察ということを考えると、皆さん大変優秀な成績を修められました。次回は、全問正解者が出ることを期待したいと思います。

最後に各校の代表が、3 校で交流ができたことや樹木について勉強できて楽しかったと感想を述べていました。



写真 1 3 校で合同開催

事例 報告Ⅱ

高槻市里山グループにおける
子ども樹木博士の取組

たかつき環境市民会議 里山グループ 杉山 正寿

たかつき環境市民会議里山グループにおける子ども樹木博士の認定試験はすでに9年間活動し、今年度で第10回の記念すべき年を迎えます。

例年夏休みに実施して既に180名を超える子どもさんが樹木博士になられ、楽しい夏休みの恒例行事となっております。

市内の北西部にある上の池公園と阿武山公民館を会場として8年間実施してまいりました。平成25年度は新たに市内中心部の城跡公園と城内公民館に会場を移し、多くの子どもさんに参加していただくようにいたしました。

高槻市及び市教育委員会の後援を得て、市の広報にて参加を呼びかけております。また、市内各小学校にも募集パンフレットやポスターを配布しております。

まず実施のための事前準備ですが、里山グループの子ども樹木博士担当者により公園の樹木の25種類を選定して写真を撮ります。子どもさん用資料として樹木のイラストを作成、また、インストラクター用の樹木の説明書も作成します。

前日に公民館の会場準備を行います。公園の選ばれた樹木の小枝を少しいただき、ペットボトルに小枝をさして展示いたします。テーブルには、樹木の名前と樹木の写真も貼ります。

当日は4班に分かれて公園で樹木観察をします。インストラクターが樹木の名前や特徴などの説明を行って勉強します。高槻市の市民の木であるケヤキや市民

の花であるウツギ（卯の花）は、必ず覚えてもらうようにしています。また、広島の被ばく二世のアオギリのことも勉強します。花が咲いていない樹木については、花の写真パネルで説明します。この時期の公園は非常に暑いですが、子どもさんは元気に頑張っております。

公民館の会場に戻り、テーブルの上に展示された樹木で復習です。小枝だけしかありませんので樹木全体の様子はわかりませんが、葉の形や実などの特徴を覚えた後、試験に移ります。

試験後の採点時間を利用して、講師により自然や野生動物、樹木などの勉強をいたします。そして試験結果の発表と認定書の授与です。

素晴らしい認定書をいただき、子どもさんたちは大喜びです。夏休みの立派な宿題ができ上がり、環境のことなども学び、満足のようです。初段や二段の子どもさんも多くいます。

このイベントの様子は、たかつきケーブルテレビ（J:COM）さんにより市内に放映されました。参加者の中には、小学生だけでなく保育園児や大人の方も参加されることもあります。

これからも樹木と楽しく触れ合いながら、樹木の特徴や名前を学び、子ども樹木博士に挑戦し、森林や環境に興味を持ち、自然を守ろうとする子どもたちになってもらいたいと思います。



シリーズ

東南アジアの木々たち (24)

—マストの様な不思議な樹形—



自然と植物の観察会 TREECIRCLE 梅本 浩史

今年2月の大雪、すごかったですね…。首都圏でも、あまり経験したことのない大雪に見舞われましたが、私の住む地域でも、庭公園樹や街路樹たちが雪の重み(積雪荷重)で次々と折れてしまい、多くの被害を出しました。

被害木の多くは、常緑樹のマテバシイ、シラカシ、スタジイ、クスノキ、トウネズミモチなどに集中しており、その大きな傷痕を見る度に、すごい雪だったな…としみじみと振り返っています。

昨年の12月と、今年1月。実はベトナム北部の山岳地帯でも、51年ぶりに大雪を観測しています。町が白く雪化粧をし、多い所では10~30cmも雪が積もる出来事がありました。自然は侮れません…。

さて、今回の東南アジアの樹木は、そんな雪が積もっても、すぐに枝葉から滑り落ちてしまいそうなノッポな姿をした「マスト・ツリー」(Mast Tree)をご紹介します。帆をたたんだ帆船のマストの様ですが、実際に船のマスト(帆柱)にも用いられたそうですよ。東南アジアを旅すると、必ず目に留まる高木の一つです。

この樹木、元々はインド方面に自生する常緑樹で、全体に「抗菌作用」を持つことと、空気中の「鉛」を吸収する特性があることが知られています。例えば、私達が環境の汚染度合いを調べる時、そこに生息している生物で、特定の条件に敏感な種類を用いて判定する方法があり、これを「生物指標」と呼んでいます。



Polyalthia longifolia var pendula

このマスト・ツリーも、空気中の汚染物質である「鉛」を葉っぱに取り込む性質があり、大気中の鉛のレベルを測定・分析する大切な手掛かりを与えてくれる植物なのです。



Hiroshi Umamoto

子ども樹木博士質問コーナー

茨城県植物園緑のインタープリター・森林インストラクター 堀内 孝雄



Q 公園のバラ園などでみられるバラの品種改良に日本の野生のバラが原種として役だったと言われますが、それはどんなバラが利用されたのでしょうか。

A わが国には一般にノバラと呼ばれるノイバラやテリハノイバラ、そのほかにハマナス、タカネバラ、サンショウバラなどの世界に誇り得るバラの自生種があります。江戸時代以降、ノイバラ、テリハノイバラ、ハマナスの3種がヨーロッパに導入され、バラの品種改良の原種として利用されたことはよく知られています。ノイバラ、学名ロサ・ムルチフローラ (*Rosa murutiflora*) はポリアンサ系 (房咲き)、テリハノイバラ、学名ロサ・ウィッチュライアナ (*Rosa wichuraiana*) は“つる性クライミング”の作出に貢献したと言われます。ハマナス、学名ロサ・ルゴサ (*Rosa rugosa*) は寒冷地に生育し花の香りがよいことで知られています。多くのルゴサ系の品種の原種となったことで現代バラに耐寒性付与の影響を与えたことは、特筆できます。

ちなみに、わが国最古の地誌の一つである常陸風土記には「黒坂命茨を持って城を築き」という記述があり、これが茨城県の県名の由来と言われます。なお、茨城県の県花は「ばら」で、昭和41年(1966)に制定されています。



ノイバラ
ひたちなか市
(2012.5.29)



テリハノイバラ
国営ひたち海浜公園
(2012.6.24)



ハマナス
ひたちなか市
(2014.5.17)

Q アヤメとカキツバタ、ノハナショウブはよく似ていてどれがアヤメかカキツバタかわかりません。見分け方を教えてください。

A 似たもの同士区別することは植物でも難しいものです。昔から「いずれがアヤメかカキツバタ」という言い習わしがあります。似たもの同士、区別しにくいことを表しています。また、同時にこのことは甲乙つけがたいものを言うのにも使われているようです。アヤメ、カキツバタ、ノハナショウブは日本の草地に生える野生のアヤメ科植物ですが、アヤメは草地でも比較的乾燥したところに、カキツバタは湿地で水たまりのあるところに生育しています。ノハナショウブは草地の湿地に生育しています。アヤメやカキツバタなどの花は6枚の花びら(花被片)で、花の真ん中に上に立つ上花被片3枚と横向きの下花被片3枚で構成されています。アヤメは下花被片の基部にその名の由来となった網目模様があるので区別できます。カキツバタは下花被片の基部に楔形の白い模様があり、ノハナショウブはその部位に黄色の斑紋があるので、それぞれ区別できます。

ハナショウブには多くの品種がありますが、すべてノハナショウブが改良された園芸品種です。なお、各地の水辺に野生化しているキショウブは、ヨーロッパ原産の帰化植物です。端午の節句に用いるショウブは、アヤメ科植物とは異なりサトイモ科に属します。



アヤメ
ひたちなか市
(2012.5.16)



野生化したキショウブ
水戸市千波公園
(2010.5.20)

● ● ア・ラ・カルト ● ●

草木の名前を覚えよう—樹木のメバエ

多くの植物の発芽は、春4~6月にかけて見られます。しかし、一般に野生の植物は、栽培植物のように発芽勢が揃うように改良されていません。したがって、環境が許せば時期に関係なく発芽することが可能です。都市化で暖かい東京都心では晩秋から1~2月にかけて、アオキ、ハナヒョウタンボク、ヤブサンザシの子葉が地上に現れることがあります。クヌギ、コナラ、ウバメガシなどの芽生えは春ですが、ドングリが落ちる、あるいは木についている間に白い幼根が出てしまいます。

先に述べたように、野生の植物は、タネを適期に播いてもすぐに発芽するとは限らないのです。むしろこうしたものは比較的少なく、多くの樹種では発芽までに1ないし2年、長いものでは3年以上もかかります。特に果肉が付いていたり、保存中に乾燥したりすると発芽が遅れる場合が多いのです。

メバエの形は樹種によって特徴があり、スギ、サクラ類などのように子葉が地上に現れる樹種と、クヌギ、コナラ、クスノキなどのように子葉が地中に残る2つのタイプがあります。このうち子葉が地中にとどまる樹種のほとんどは、種子が乾燥すると発芽が困難になり、乾燥した種子を播くとほとんど発芽力がなくなります。

また、自然状態でも落葉の上に落下して乾燥すると発芽力が落ち、落下してすぐに落葉や土をかぶり、土中の水分を吸収保持できた種子は発芽が良好となります。日本海側のブナ林は純林が多く、太平洋側のブナ帯ではシデ類、ケヤキなど乾燥に比較的強い樹種が混じった森林をつくりますが、乾燥に弱いブナの種子が

時雨時の湿潤状態、積雪による保護などによって発芽力が維持されるためと思われます。

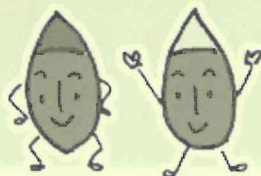
発芽に要する時間に基づいて、次のような発芽型の類別が可能です。

- 胎生型**…樹上で既に発芽、発根するもの。種子は乾燥を非常に嫌うので取りまきします。イヌマキ、メヒルギ、オヒルギ
- 短期型**…落果後すぐに発芽若しくは発根するもの、殻斗果（ドングリ類）及び子葉が地中に残るもの。また、種子がごく小さく寿命の短いもの。ウバメガシ、タブノキ、ヤナギ類、ブナなどは5℃前後では1~2月に発芽してしまいます。
- 1年型**…成熟の翌春発芽するもの。秋まき、春まき、いずれでも最初の春にはほとんど全部発芽します。スギ、コブシ、トチノキ、シラカシ（極端な乾燥にあうと発芽力がなくなります。）
- 2年型**…成熟の翌春、翌々春に発芽するもの。この間湿った状態にしておくか、あるいは休眠を早く終わらせるために低温湿層処理を行うと発芽が揃います。アカエゾマツ、サクラ類、カエデ類、シロヤマブキ、エゴノキ
- 多年型**…成熟の翌年から4年頃までの春に少しずつ発芽するもの、後熟性。早期に採種して取りまきか、低温湿層処理などを行うとよい。チョウセンゴヨウ、コウヤマキ、マンサク、ツゲ
- 長期休眠型**…成熟の2年ないし3年目の春にはじめて発芽してくるもの。ツリバナ、ヤブサンザシ、モチノキ、タラヨウ、ハナイカダ

(森林インストラクター養成講習テキスト選集：森林の観察〈谷本丈夫先生〉から)

事務局だより

◆平成25年度の「子ども樹木博士」認定活動の実施状況について、通常総会前の速報ですが、実施結果として報告等をいただいたのは25都道府県（前年度25都道府県）の63団体（前年度60団体）から、実施回数は延べ72回（同69回）、参加者数は延べ約20百人（同22百人）でした。平成26年度は、更なる飛躍を期待しています。



子ども樹木博士ニュース

2014年6月1日 No.55

子ども樹木博士認定活動推進協議会

〒112-0004 東京都文京区後楽1-7-12 林友ビル6階

一般社団法人全国森林レクリエーション協会内

TEL: 03-5840-7471 FAX: 03-5840-7472

E-mail: kodomohakase@shinrinreku.jp

URL: <http://www.shinrinreku.jp/kyokai/kodomokyou.html>

<http://www.shinrinreku.jp/kodomo-n/main.html>